
騒音

日向梨久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騒音

【Nコード】

N6221B

【作者名】

日向梨久

【あらすじ】

上の部屋の騒音に悩まされる私は、ただ、普通の生活がしたかっただけ。

私は、何処にでも居る様な、普通の女子大生だった。特に秀でた才能もなく、だからと言って勉強が出来ない訳ではない。大学内でも極々普通の平均的な位置に居た。だから周りと同じ様に、普通に就職して普通のOLになるのだとばかり思っていた。

だが、現実はそのようではなかった。

周囲が続々と内定を貰う中、私は途方に暮れていた。特別高い給料を望んだ訳でもない。良い待遇を望んだ訳でもない。しかし、なかなか内定は貰えず、遂に就職先が決まる事はなかった。

深夜のコンビニでバイトしている私は、昼間にアパートで就寝する。昼夜逆転の生活が当たり前になってしまっていた。

独り暮らしをしている私には、お金の余裕はない。少しでも時給が高い所を探していたら、必然的に深夜のコンビニになったのだ。

学生の時はまだ良かった。両親からの仕送りと、多少のバイトで遊ぶ余裕もあった。しかし大学も卒業した今、いつまでも両親を頼る訳にはいかない。

両親には『無事就職した』と伝えてしまったからである。見栄ではない。両親を心配させまいと思つての事だった。

「う……ん……」

寝返りを打つついでに枕元の時計を見る。時刻は19時過ぎ。バイトは20時半からで、バイト先はアパートから歩いて10分の距離にある。シャワーを浴びて準備するには十分な時間だ。最近では目覚まし時計なしで起きられる様になってきた。生活が板に付い

てきたからだろう。

溜め息を吐き、私の1日が始まる。

ドンツ

不意に音が響いた。

眉間に皺を寄せる。またか、と私はまた溜め息を吐いた。

学生時代は気付かなかったが、この時間になるといつも鳴る。酷い時は昼間も何度か鳴る時があった。

ドンツ、ドンツ、と、何かを落としたのか、足音なのかは解らなかったが、私には堪らなく不快だった。バイトばかりの日々で、神経質になっているのかも知れない。だから、少しの物音でも苛々としてしまうのだ。

私は取り敢えずシャワーを浴びてしまう事にした。

バイト中は特に忙しいと言う訳ではない。深夜だから当然なのだが、客も少ないのであまりやる事がないのだ。

適当に棚卸を済ませると、レジの中の奥に入って適当な雑誌を読む。ファッション雑誌を読んだって、虚しくなるだけなのだが。今の私には、新しい洋服を買う余裕なんてない。また溜め息が漏れる。

私の人生、一体何なのだろうかと。

ふと、ピンポンという音が鳴り響いた。自動ドアが開かれた音だ。こんな時間に誰だろうと無意識に時計を確認してからレジに立つ。

客は20代半ばの青年だった。服装は灰色のスエットとラフな出で立ちで、インスタント食品棚の辺りをウロウロしている。

早く決めてくれと苛々しながら、それでも顔に出すのは極力控え、青年がレジに来るのを待った。

青年が購入したのはインスタントラーメンにインスタント焼きそば、スナック菓子、菓子パンが数個、それに炭酸飲料水に肉まんだった。お世辞にも健康的とは言えない食生活が伺える。

黒ぶち眼鏡を神経質そうに人差し指で上げ、伏し目がちに此方の一挙一動を見つめている。

まるで見張られてる気分だ。

そんなに見なくなつて間違えたりしないわ。内心毒づく、私は代金を受け取り、品物を渡す。

青年は無言でそれを受け取ると、そそくさと店を後にした。

帰宅したのは午前5時半頃。街が闇から光へと、ゆっくりと変貌を遂げる時間帯である。

約9時間。途中の休憩時間を除いても8時間は働いた。

肩凝りが酷い。私は湯船にゆつくりと浸かる事にした。食事は勿論コンビ二弁当で、賞味期限が過ぎた物を店長の許可を得て、無料で譲って貰っている。コンビ二の袋をテーブルに置くと、直ぐに湯船に湯をはった。ユニットバスの贅沢とは言えない造りではあったが、バスとトイレがあるだけでも幸せだ。

ドンッ

また音がした。まるで自分が帰って来るのを待ち構えていたかのように。

私は苛々を抑えながら、湯船に入った。ゆつくりと浸かり、リラックスさえすれば音も然程気にならなくなるだろう。

私はきつとストレスが溜まっているだけなのだ。だから小さな事にも直ぐ苛々してしまう。

ドンッドンッ

今度は二度続けて音がした。

イラッとしたが、冷静さを取り戻そうと深く深呼吸する。湯船の湯気が体内に入り、入浴剤の香りが鼻腔に広がる。お気に入りの薔薇の香りだ。

目を瞑り、肩の凝りを解す様にゆっくりと首を回す。

少しだけ、凝りが取れた気がした。

入浴を終えると、食事の時間だ。朝の6時少し前。これが私の夕飯となる。テレビからは朝のニュースが流れていた。

「あ」

閃きと共に開けた口から、割り箸で運んだご飯がぼろりと溢れるのを慌てて押さえ、私は再度その閃きに思考を巡らせた。

今日来た客の事である。

灰色のスエット、黒ぶち眼鏡のあの青年。深夜2時。確か、昨日か一昨日かその前か。以前にも見た事があったのを思い出したのだ。しかし顔がうる覚えで、もしかしたら違う人物かも知れない。だが、あの伏し目がちに此方を伺う様な視線。不快感漂う雰囲気。

「うーん、ま、家が近かったら同じコンビニに何度も現れても不思議じゃないか」

つい独り言を口走り、自分の言葉に納得し、残りの弁当に取り掛かった。

次にその青年が現れたのは、私がバイトを上がるのとはほぼ同時だった。

青年が入ってくるのを目の端に止め、レジを次のバイトに任せて口ツカールームへと入る。やはりあの青年だ。

灰色のスエットに黒ぶち眼鏡というお決まりのスタイル。

前回は午前2時だった。今回は午前5時。彼もまた、昼夜逆転の生活がをしているのだろうか。

「お先に失礼します」

店長とバイトに声を掛けて外へ出ると、あの青年がふらふらと前方を歩いているのが見えた。

その足取りはゆっくりとしたもので、私が向かう先と同じ方向だった。

彼を追い越すのは簡単だったが、それは躊躇われた。彼の前に出て、あの視線を浴びるのが堪らなく嫌だったからだ。

私は仕方なく歩調を弱め、追い越さない様に努めると、必然的に彼の後をつける格好となってしまうた。

「え…」

私は思わず小さく声を上げた。

私のアパートはバイト先から徒歩10分程度。そのアパートに、青年は躊躇なく入って行ったのである。

同じアパートの住人だったのか。

私は今度は意図的に後をつける様に彼の背後を見守った。

アパートは3階立てで、エレベーターはなく階段のみである。青

年はカンカンと階段を上り、3階で止まり、右方向へと向かった。そして鍵を開ける音がし、パタンと扉が閉じられた。

「私の真上…」

なんと、音の主はあの青年だったのか。

私は腹立たしさを覚えた。

文句の一つでも言ってやろうか。

私は3階まで上がると、青年の部屋の前に立った。インターフォンを押す。ピンポンという音が中で鳴るのが聞こえた。

青年が出てきたら何と言ってやろうか。嫌いといきなり言うのも失礼だろうか。やんわりと諭してやるのが良いだろうか。

青年が顔を出した時のシュミレートを頭の中で行う。だがなかなか青年は出て来なかった。先程帰って来たのを見ているのだが、確実に室内には居る筈である。にも係わらず、青年が出てくる気配は全くない。

「何よ…居留守…？」

無性に腹が立った。もう一度インターフォンを押してみたが、結果は同じだった。

私は諦めて自室へと戻る事にした。何度インターフォンを押しても結果は同じだと思ったからだ。

騒音に居留守。あんな迷惑で失礼な奴が上に住んでいたなんて。腹立たしい。

私は部屋に戻ると、肩から掛けていたバッグを勢い良くベッドへ叩き付けた。それでストレスが解消される訳ではなかったが、どうも苛々が治まらない。

明日、もう一度苦情を言いに行ってやろう。

そう考えて溜め息を吐いた時だった。

ドンッ

ドンッドンッ

バツと音がした方へ顔を向ける。私の真上だ。間違いない。私は掃除用具入れから床掃除用の取つての付いた棒を持ち出した。

ドンッ

響いたのは内側からだ。私は掃除用の棒で思い切り天井を突き上げた。

パラパラと天井の埃と塗装が微かに舞う。上手く上に響いただろうか。

ドンッ

私はもう一度天井を突き上げた。

私が味わった苦しみを、彼も味わえば良いんだ。

ドンッドンッ

今度は二度続けて突き上げた。

暫く上から音が聞こえて来ない事を確認すると、やっと私はその棒を離れた。

少し、すっきりした。

私は久しぶりであろう笑みを口元に携えた。

次の日、目が覚めると爽やかな気分だった。うんと両手を上げて

身体を伸ばす。

最初からこうしてれば良かったんだわ。

私は昨日の小さな『報復』を手伝ってくれた掃除用具を誇らしげに見つめた。普段は埃を取ってくれるだけの掃除用具。だけれど、時には魔法の道具となる。報復を手伝ってくれる道具へと。

さて、今日もバイトだ。

私はいつもの様にシャワーを浴びてバイトに向かった。

明るくなりかけた帰り道を、私は肩を落としながら歩いていた。時折立ち止まり、溜め息を吐いてはまた歩き出す。僅か10分の距離が、とてつもなく長く感じられた。

今日は全くついていない日だった。

棚卸しの際に商品は落としてしまっし、賞味期限切れの品物を下げ忘れて客に文句を言われた。終いには、お釣りを渡し間違えてしまい、店長に怒られてしまった。普段温厚な店長だけに、怒られたという事実は失敗したという事実よりもキツい。

私は泣きそうになりながらも、何とかその場は泣かずに最後まで仕事をした。

普段なら絶対にしない様な失敗を、1日に何度もしてしまうなんて。

原因は解っていた。あの青年の所為だ。

青年はいつもの様に、何事もなかったかの様に現れた。そしていつもの様にインスタント食品を籠に詰めると、レジへ持って来た。

私は何時も様に、商品のバーコードから値段を読み取り、ディスプレイに表示させていく。

青年の視線が注がれているのが解った。またあの黒ぶち眼鏡の奥から卑しい目を此方に向けているに違いない。私の一挙一動を観察し、間違えない様に見張っているのだらう。まるで、看守と囚人の様だ。

私は淡々と金額を告げると、品物を袋に詰め始めた。だが、青年は動こうとしない。

不審に思い、不意と顔を上げた。

そこには黒ぶち眼鏡の青年がいた。神経質そうに、中指で眼鏡を

押しやっている。

だが、その視線の先は、私の手元ではなく、私の顔に、目に向けられていた。

ほんの一瞬、背筋に冷たい物が走った。

彼は、青年は何故此方を見ているのだろうか。探るような視線。深い漆黒の闇を感じさせる目。

ゾクリ、とまた背筋に冷たい物が走った。

まさか。まさか。

青年はもしかしたら昨日、私がインターフォンを押した時、玄関に居たのかもしれない。そしてインターフォンを必死に押す私の姿を、覗き穴からじっと見つめていたのではないだろうか。

そして青年はきつと知っているのだ。私が下の住人だという事を。下から突つついた事も。

だから青年が今、私に向けている視線は批難のものだろう。

ゴクン、と生唾を飲み込んだ。

何よ、悪いのはそっちじゃないの。あんな音を立てて。騒音以外の何物でもないわ。

私はキツと青年を睨み返してやった。

何を言われた訳ではなかったが、反論する気だった。貴方が悪い、と。煩い、と。

言葉が喉まで出かかった時だった。青年は私の目を見つめたまま、代金を差し出した。その口元にはうっすらと笑みが溢れている様に見て取れた。

何、こいつ……。

異様だった。何故、青年は笑っているのだろうか。

理由が解らないその異常な行動に、私の思考回路は正常な判断力を奪われたに違いない。お釣りを渡す手が微かに震えてしまったのも、その所為に違いない。

だから私は金額を間違えてしまったのだ。

目の前に見えて来たアパートに、私は一瞬、自室に戻るのを躊躇した。帰らない訳にはいかない。明日も仕事があるのだ。

しかし、またあの物音がしたら。

憂鬱な気分のまま、私はアパートの扉を開けた。

ドンッドンッ

ドンドンドンッ

「嫌いッ！！」

叫んで私は布団を頭からすっぽりと被った。叫んだ所で上に聞こえるとは思っていなかったが、それでもしないと何かが爆発してしまいそうだった。

帰宅して直ぐに上からの音が騒がしくなった。初めは我慢していた。耳を塞いだり、テレビのボリュームを上げたり、自分なりに気を紛らわそうと努めた。

だが、駄目だった。

もう、青年の部屋まで行って抗議する気にはなれなかった。覗き穴からあのじつとりとした目で見られるかと思うと、それだけで背筋が凍る。

昨日の様に掃除用具で反撃する気も起きなかった。意味を成さないと解ってしまったからだ。

ドンドンッ

「嫌い！嫌い嫌い！！」

泣きたくなってくる。頭の中をぎゅっと掴まれて居る様な、痛み

を伴わない不快感。眉間に皺を寄せながら、両耳を布団で強く押さえる。

それでも否応なしに脳髄に響く様な、音。騒音。雑音。

ドンドンドンドンドンッ

このままだと、私はどうかなってしまう。狂ってしまう。狂ってしまう！狂ってしまう！！

段々と呼吸が荒くなる。息苦しい。鼓動も激しくなり、体内からも私の頭の中を打ち付ける。

ドクンドクン

ドンドンッ

最早私の心臓の音なのか、上から響いてくる音なのか、判別がつかない。

ドクンドンドクンドン――

私は掃除用具の棒を持って立っていた。目の前には見慣れた扉がある。アパートの扉は全て同じ色で同じ造りになっているから当然だ。

思い切り腕を振り上げる。そして、勢い良く振り下ろした。

ガンッ

一回。

ガンッ

二回。

ガンッ

三回。

中からは何の反応も無い。それが更に私を苛立たせた。
何故、なぜ。

私ばかりがこんなにストレスを感じなければならないの。

ガンッ

私は何もしていない。それなのに、何でそんな目で見るの！

ガンッ

元来、物を殴り付ける為に作られた物ではないそれは、五度目の
衝撃に耐えられず、バキッと音を立てて折れた。

それでも私は叩くのを辞めない。道具を使えないのであれば、素
手だって良い。扉を壊すつもりはない。

相手に騒音を、私の苦しみを与える事が出来れば、それで、良い。

ドンドンドンドンドンドンッ

連続して叩く。殴り付ける様に。

手が痛くなるのが、関係無い。赤く腫れようが関係無い。手首が
折れようが関係無い。

ぼうっと座席の窓から、隣で瞬く赤いランプを見つめる。くるくると回るそのランプは、幻想的で、別世界へと誘われている様だ。

——ずっと隣の扉を叩き続けていたんですよ。

ズキンと右手が傷んだ。

——私、怖くなっちゃって。

あまり座り心地の良いシートではないらしい。ずっと座っていたら腰が痛くなりそうだ。

——いえ、夜の仕事をしていたみたいなので、良く知らないんですよ。

手首が重い。乱れた髪をかき上げようとしたが、ガチャガチャとした音と重さで上手く出来なかった。

——いえ。昨日引越されましたから、今は誰も。

誰かが外で話をしていた。時折此方を伺う仕草を見せる。
今の私にはどうでも良かった。ただ、静かな所に行きたい。それだけだ。

ドンッ

ビクリ、と身体を震わせる。真上から、音がした。

ドンドンッ

私は耳を塞ぐ。何故、なぜ。

「あー！あー！！」

叫びながら私は車を飛び出した。自分の声が頭の中で反響する。それと同時にあの音も響く。響く。響く。

「あー！あー！！」

私はより一層声を張り上げた。

誰かに身体を押さえ付けられたけれど。私はこの場から早く逃れたかった。

身体をばたつかせる。手を足を、振り回す。それでも止まない音。何なの。何なの。

耳の奥。頭の中。

私はがむしゃらに頭をかきむしった。手の痛みも忘れ、髪が抜けるのも構わず、無我夢中で。

音が。音が。

ドンッ！

誰か、この音を、止めて……。

5（後書き）

私自信、上階の騒音に悩まされています。それこそ気が狂いそうな程に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6221b/>

騒音

2010年10月10日03時52分発行